



中国がわかるシリーズ8 中国の統一

ライフネット生命株式会社 社長 出口 治明

インドの統一(マウリヤ朝、BC317年)に遅れること、約100年、中国でも統一国家が生まれようとしていました。戦争に明け暮れる日常は、庶民の心の中に統一＝平和を求める気運を育てていたのです。そして、統一を果たせるのは、軍事力に秀でた秦をおいて他にはありませんでした。BC316年、蜀を滅ぼし豊かな四川盆地を手中に収めた秦は、BC286年、魏から、大塩田である解池を奪取し中原の塩の供給を独占して、経済力を更に高めました。こうして、秦による中国の統一は、時間の問題となりつつあったのです。

秦の名将軍、白起が、趙を大破した翌年(BC259)、その趙の都、邯鄲で、秦の公子に1人の子供が生まれました。名を政といいました。公子は人質生活を送っていましたが、ソグド系の気鋭の大商人、呂不韋が「奇貨居くべし」として援助を始めたのです。そして、呂不韋の愛人の歌姫を、求められるままに公子に譲りましたが、彼女は既に子を宿していたと云う伝承が残されています。これは、漢の武帝をことさらに顕彰し、始皇帝を必要以上に貶める(漢代に編纂された)「史書の1つの形」であると考えられます。

呂不韋の工作によって公子は秦に帰国し、荘讓王として即位しました。有能な呂不韋はBC249年、秦の丞相となりました。BC247年、荘讓王が亡くなり、13歳の政が王位を継ぎました(この年、劉邦が生まれています)。成人した政は、BC237年、呂不韋を失脚させ、BC230年、韓を滅ぼしたのを皮切りに、李斯(天下一統を進言した楚人)や将軍、蒙恬を用いて統一事業に着手しました。燕の太子が、秦の侵略から国を守る最後の手段として、荊軻に命じて秦王暗殺を試みたのは、BC227年のことでした(「風蕭々として易水寒し、壮士一たび去って復た還らず」という荊軻の歌が残されています)。

BC221年、最後に残った斉を滅ぼし、遂に、秦王、政の手で中国は統一されました(ただし、面積にすれば、現在の中国の3分の1程度であったようです。中国が更に巨大になるのは、大元ウルス、クビライの時代以降のことになります)。しかし、その後も、中国の中で、7雄、もしくは新石器時代からの文化地域は1つの纏まりとして、根強く居残ることになります。なお、中国は、海と砂漠や大山脈によってユーラシアの他の地域とは遮断されています。しかし、韓半島(北部)とベトナム(北部)だけは、比較的簡単に往来が出来ました。この2つの地域(国)は、中国史、いや東アジア史の上で、中国の影響を色濃く受けるという意味で、常に特別の地域(国)であり続けます(例えば、同姓不婚制度なども中国から輸入されました)。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

政は、統一後(BC221)、伝説の「3 皇 5 帝」から、皇帝号を創出し、自らを始皇帝と称しました。同時に、制・詔(命令)、朕(自称)という言葉も創出しました。そして、全国に中央政府から官僚を派遣して支配する郡県制(中国全土を 36 郡に分割。但し、36 郡は、まだ完全には特定されていません)を敷きました。また、始皇帝は、統一国家を有効に機能させるため(行政上、軍事上の要請から)、文字の統一(秦の行政文字である小篆、隸書を採用)、度量衡の統一、車軌の統一を行いました(もちろん、すべて、秦の基準に合わせたことは言うまでもありません。なお、半両銭による貨幣の統一を行ったのは 2 世皇帝です)。さらに、後になって、法家を軸とした思想統制まで行おうとしました。これが有名な「焚書坑儒」です。

始皇帝が大変有能で、秦が厳格な法治国家であったが故に、命令(挾書の律、BC213)は徹底され、大量の竹簡や木簡が燃やされて、諸子百家の思想の自由運動は、息の根を止められました。そのことは、惜しんでも余りあるという他はありません(例えば「農家」の思想内容については殆ど何も解らないままになっています)。儒教の経典も多くが灰となりましたが、儒教では、[西]漢の時代に、学者が暗唱していたものを書き留めたものを今文、焚書を免れて発見されたものを古文と呼んで区別しています。なお、秦律(法治主義)が、辺境に至るまで徹底されていたことは、辺境で出土した竹簡や木簡が雄弁に物語っていますが、これは、国土の広さや時代の古さを考えると、まことに驚くべきことであると言わざるを得ません。秦帝国は、人類史上初の強力な中央集権国家であったのです。

註:「3 皇 5 帝」中国の伝説的な太古の帝王で、史記によれば、3 皇は、伏羲、女媧、神農(炎帝)とされます(但し、史記のこの部分は唐代の補筆です)。5 帝は、黄帝(中華民族の祖とされています)、帝顓頊(せんぎょく)、帝嚳(こく)、帝堯、帝舜の 5 人を指します。この 5 代は、すべて、人徳があり聡明なものに譲位する禪譲で王統が引き継がれました。とりわけ、堯舜は、儒家によって、理想の聖人君主と憧憬されました。舜は、治水の功績があった禹(夏王朝の開祖。本来は、交通網が整備された戦国時代の旅行神と考えられています。治水も鉄器なくしては為し得ないので、おそらく戦国時代の伝説だと思われる)に位を譲り、九州を治めた禹を最終ランナーとして、伝説の聖天子時代は終わりを告げたと云われています。